

強制抑留者が語り継ぐ労苦

山梨県 中村 清

一、出征からシベリア収容まで

私は、大正十五（一九二六）年五月四日、河口湖町の本籍に生まれ、河口湖町立青年学校本科四年卒業、家業に従事中、昭和十九（一九四四）年十二月一日、現役兵として東部第六部隊（東京都麻布、歩兵師団）に入隊、直ちに北支山東省浜県駐屯中の北支派遣衣第四二九四部隊第四隊に転属して入隊、初年兵教育を受けながら浜県方面の警備につきました。

昭和二十年八月九日、ソ連軍が日本国との不可侵条約を破ってソ満国境を南下、満州国に攻撃を開始したところ、私どもの部隊は満州国境近くの朝鮮北部の咸興市で警備の勤務に就いていました。

八月十五日、大本営から重大な発表があるとい

う情報が入り何事だろうかと心配していたところ、部隊全員集合整列の台上で部隊長から、天皇陛下の命令で日本はポツダム宣言を受諾し米連合軍と停戦した、陛下は「忍ヒ難キヲ忍ヒ」世界に平和を開いた、日本は敗戦にあらずして停戦したのだ、と涙を流しながら何度も繰り返し私どもにわびているようでした。私は、日本軍は神の国の軍隊であり、日本に敗戦などあり得ないと信じていたので「マサカ」と信じられず、こんな苦労して戦ったのにとがっかりしたが、反面「あ、これでおれたちは生きて日本へ帰れるかもしれないぞ」と安心めいた気持ちも働いたのは初年兵の浅はかさでもあった。

八月二十日ころ、咸興市にもソ連戦車部隊が入り、同日武装解除、私ども兵隊は同市内の女学校校舎に収容され、貴重品、万年筆、時計などダバイ（よこせ、よこせ）と略奪されてしまった。二十九日早朝、「日本軍は興南港から乗船し東京にダモイ（帰る）する、軍装を整え直ちに庭に集合

せよ」との部隊長命令、早々と日本に帰れるぞと喜び勇んで学校から興南港まで（約二〇キロメートル）を夢中で歩いた。

八月三十日夕刻、興南港で私どもはソ連の油輪送に使われる油槽貨物船に乗せられ、夜中の日本海を一路北上、三十一日夕方、大きな軍港ウラジオストックに上陸させられた。聞けば「日本ではまだ米軍占領下で混乱中で、ソ連からの引揚軍人の受け入れはできないと断られたのでしばらくここで待機するのだ」と言い訳していました。私どもはだまされたと騒いでもどうにもならない捕虜の身の悲しさを身にしみて感じました。

ウラジオ港の軍用倉庫の庭で野宿した私どもは、再び約五〇キロメートル離れたアルチョムという炭鉱の街まで二日間も行軍し、九月二日、アルチョム第一収容所に入れられ、石炭鉱の採掘人夫として酷使されました。

二、収容所の生活と炭塵との闘い

アルチョム地方は良質な石炭鉱の発掘で有名なところで、大戦中は人手不足で一時採掘は取り止めていたようですが、スターリンの戦後五カ年計画でいち早く鉱山発掘の人夫として私どもをここに収容したわけですが、何も知らない私どもは、日本が我々の帰国の受け入れ準備ができるまで一カ月か二カ月の使役だろうと思っていました。

収容所は、もと石炭鉱を入れた倉庫を改築したレンガ造りの大きな建物で半地下式になっており、防寒のため小さな明かり窓が横壁に二つあるだけ。中央に一・五メートルくらいの通路があり、両側は三段式ベッド（木製）となっている。この通路の両側に鉄製（ドラム缶式）ストーブが置いてあり石炭で暖を取った。

作業所は地下二百メートルくらいが石炭層掘場で一日三交代、十五人一組の作業班で私はこの班長となり、班別に与えられたノルマ達成ができていくつも怒られていたが、採掘方法や運搬方法

等いろいろ工夫した結果、私の班の作業成績が次第に良くなり、収容所第一の成績を上げ所長から褒められたこともあった。

食事は捕虜規定により黒パン、雑穀、米、塩、砂糖、たばこの量まで決められ表示してあったが、収容所ではいつも欠配で、空っぽのスープや雑穀だけで大豆を生で食べて飢えをしのいだこともあり、昭和二十一年春には栄養失調症で亡くなった戦友が多かった。入浴はほとんどなく、着の身着のまま、衛生環境は最低、シラミは多発、ために発疹チフスも多発した。正に最悪の地獄の責め苦の中で生きてきました。

私ども第一収容所の収容人員は二千人と聞いていましたが、石炭掘りは毎日朝七時から十五時、十五時から二十三時、二十三時から七時までの三交代。一交代作業人員五百人という大世帯の作業所ですから、一時はアルチョムの街は石炭の街として評判になったようですが、地下採掘場の我々作業員はその炭塵で肺を侵され、次々に病人とな

りました。

困ったことにソ連の軍医は、病気になれば熱が出る、熱が出ても三七度五分以上にならないと絶対に休ませてくれず、熱の出ない病気を訴えても「うそつき」だと言って取り上げられず、炭肺患者や栄養失調者は作業場に駆り出され、作業中バツタリと事切れた戦友もおりました。

昭和二十一年六月ころから「日本新聞」が発行され、反軍思想や共産主義の宣伝教育が始まりましたが、これは帰国までに私どもを赤化するというソ連共産党の方針だと聞きましたので、私は何でもわかったような顔をして民主主義者になつてまじめに働きました。

三、抑留中極限状態のときの信念

私は、栄養失調になり隣に寝ていた戦友が次々に死んでいく、もはや私も極限状態になつたとき、乗り越えてきた信念として「あきらめてはならない、生きて祖国に帰るのだ、望みをかけよ

う」と自分にも戦友にも言いながら頑張りました。そして心身を支える工夫として、重労働はみっちりしてできる限り休養しようと心掛けてきました。

昭和二十一年十一月二十五日、アルチョム炭鉱で働く者のうち三級以上の病弱者及びハラシヨラポーター（よく働いた抑留者）に帰国が許された、これはスターリン閣下の恩情であると収容所長から誇らしげの帰国命令であったが、我々としては正に地獄からの生還命令、生きて帰れるぞと躍り上がって喜びました。

十二月一日、アルチョムからウラジオーナホトカと汽車で送られ、ナホトカ港まで日本国から迎えに来たという抑留者引揚第一便「大久丸」に乗せられ、十二月七日早朝出港、同八日舞鶴港に到着。日の丸の旗を振りながら出迎えてくれた婦人会の皆さんの「兵隊さん御苦労さまでした」の温かい慰めの声に涙があふれ「生きて帰ったぞ」と日本の土を踏み締めました。

四、帰国後の生活と子孫に言い遺したいこと ば

日本も食糧不足で大変のようだったが、私の郷里河口湖付近では米作り農家が多かったので比較的豊かでした。

帰国後、昭和二十二年六月から河口湖村役場に公務員として奉職し、生きて還った喜びをかみしめながら、公僕として日本再建に尽くしてまいりました。

最後に、子孫や国民の皆さんに遺したいことばは「戦争は絶無とすること。平和な社会、健康で円満、仲の良い家庭を築いて幸福に暮らして下さい」と祈念し、私の体験報告を終わります。